

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（六八）

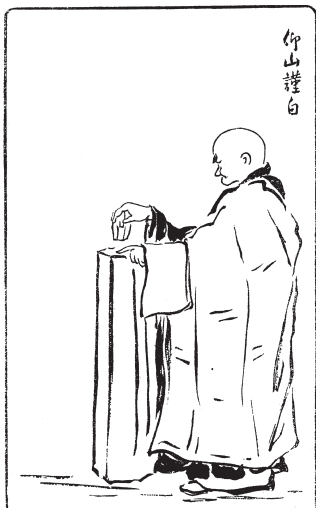
第九〇則 仰山謹白

〔示衆〕

衆に示して云く、屈原独り醒む、正に是れ爛醉、仰山夢を説う、恰も覚時の似し。且く道え、万松は恁麼に説い、諸人は恁麼に聴く。具く道え、是れ覚か、是れ夢か。

〔本則〕

挙ぐ、仰山、夢に弥勒の所に往き、第二座に居る。（且道、第一座は是れ誰ぞ？）尊者白して云く、「今日は第二座の説法に当る」（低声、来つて是非を説く者なり）山、乃ち起つて白椎して云く、（諦観法王法、法王法如是）魔訶衍の法は（此の義、文長し）四句を離れ、百非を絶す。謹しんで白す（言清く、行い濁る）。



仰山謹白

『従容録』一〇〇則の中では、仰山がテーマとなっているものが八則ですが、これまでとりあげたのはまだ三則だけ。これもピッチを上げなければなりません。

仰山、僧名は慧寂。のちに「小釈迦」の異名で呼ばれたほど。よほど聡明で優秀な方だったのですね。出身は遠く広東省で、一五歳のとき出家を志すも、両親の反対で果せず、一七歳の時に自ら二指を切つて志の強さを示し、初めて許されました。初めは戒律を学び、のちに禅門の巖頭や石室に師事し、やがて湖南省大潯山の靈祐に師事して遂にその法を嗣いだ。のちに江西省の仰山に道場を開いて禅風を揚げ、大師号を受け、紫衣を拝領した。その一派は、潯山とともに潯仰宗という禅門五家七宗の中の宗派、潯仰宗の開祖とされる。仰山は八〇七～八八三の生涯ですから、洞山良价さんとはほぼ同世代であり、また、同じ江西省中部に道場があったので、互いにその英名はよく知っていたはずですが、なぜか二人の交渉はほとんど伝えられていないのは謎です。

ともあれ、この則の〔示衆〕をまず見ま

しよう。

仰山がある時夢をみた。弥勒尊者のいる兜率天へ行って第二座の位置について。すると、一尊者が、「今日は第二座の方が説法当番ですから、どうぞ」。そこで、仰山は座から立ち、椎をカチンと打って、「この仏の説法を見なされ。これこそ真実の説法でありますぞ」と。

「大乘の説法は、すべての言語教説を離れ、あらゆる差別論理を超えているのじゃ。このことを謹んで申し上げる」と言って自座に戻った。

こんな風光です。明慧上人もそうですが、エライ方はすごい夢をみるものですね。仰山は最高最上に天の世界に行って、釈尊と同様の説法をしたというのですから。だからこそ「小釈迦」と称されるのですね。少しむつかしい語句がありますが、「弥勒」はインドのバラモンの子で、今も兜率天という天界にいて、無限の時間の後に、この世に出て、釈尊の教化を補佐するという菩薩です。

また、「椎」は「槌」と同じで、これを打って修道者たちに知らせる鳴らし物の一つ。わが寺にも、三〇〇年以前の古本堂の廃材で造った槌が保存されていて、住職が結制上堂

を行う時に用います。結制の時は、他山から有徳の尊宿を「助化師」に招き、その方が「諦観法王法、法王法如是」と唱え、この槌をカチンと打って無事に結制円成を告げる。つまり、「槌」もこの偈文も、禪寺では重要な儀式の際に用いる法具と偈文として、今に生き



仰山が 15 年間修行した
湖南省大瀉山の万仏殿（現代）

ているのです。万松さんは、相変わらずおもしろいコメントをつけていますね。

さて、核心は「本則」。おおよそ次のような情景であります。

仰山が夢で弥勒の所に行き、第二座についた。今日は第二座が説法の当番です、と

うながされて、右の偈文二句を唱えた。大乘仏教の核心は、冗説や理論分別をこえているのだ、と端的に。

ここで重要なのは、やはり二句の偈文であります。仏教は理屈や哲学などではなく、誰もが毎日体験している日常生活の端的にあるという意味。

ふり返って、現代の私たちは、ありとあらゆる情報のウズの中にありますね。情報にふりまわされて生きているといってよいほどです。テレビ・ケータイ・スマホ……と、とどまることなき情報科学。その根本であり、中心は、文字であり言語です。つまり、言葉の洪水の中に現代人は生かされているのです。その中から、何をえらび取って我が核心とすれば、己れのアイデンティティが守られ保たれるのでしょうか。だからこそ、禪が求められ注目されているわけですね。

禪は常に「教外別伝」をいいますが、これは、大切なモノは経典や文字が指し示している所にあるのではなく、その精神をズバリと端的にとらえ、会得する所にこそある、それは坐禅だ、というのであります。

坐禅は正に現代の救命王であり救世主そのものです。

山内動静

降誕会

二〇二一年四月八日、降誕会（花祭り）が開催されました。新型コロナウイルスの影響により、配役者のみで実施。他に、明珠の編集者や椎名東堂など六人が参加しました。

降誕会は午後二時に始まりましたが、その一時間ほど前から、練習を行いました。導師を明石師、先導を小畑代表、殿鐘を松井、維那を杉浦、侍者を佐藤、侍香を山桐、副堂を五十嵐の各氏が担当。明石師の指導に従いながら、着々と準備を進めました。

本番は、緊張感を持って厳かに行われました。般若心経や開経偈を唱えましたが、その時には、マスク越しでも各々の声がよく聞こえたのが印象に残っています。

法話で、明石師は次のように述べました。

人生一〇〇年時代の現在、我々の平均寿命は劇的に伸びると言われています。医療の発展によって老化も適切に対処されます。もし、それが現実味を帯びれば、今までの常識は通用しません。六〇歳で定年となって隠居生活に入るのではなく、より長く仕事をするこ

になります。今回は、江戸時代中期の随筆家・歴史家・俳人である神沢杜口という人物に、これからの生き方を学ぼうと思います。

彼は、四〇歳になって奉行所の与力を引退し、晩年に至るまで、京都市内の借家を一八回転々としました。これは「情や執着にとらわれないための行動」と言われています。

また、『翁草』という大著を一〇〇巻まで書きましたが、七八歳の時、天明の大火に襲われ、家宝と共に失いました。それにもめげず、倍の二〇〇巻まで完成させました。そんな彼の生き方のモットーを、著作から推察したところ、それは「知足」です。現代語訳ですが、こんな言葉があります。



降誕会の明石師。後ろ向きは椎名東堂

「ただ、衣食住がある程度叶えられていれば、それ以上の願いはない。これで満足できないのであれば、珍しい財宝を得たとしても、同じく不満足だろう。人間の諸々の欲求には食欲と同じように対処すれば、過ちを犯すことはない。食欲は朝、夕方に必ず起こるものの、ほどよい食事を頂けば、あつという間に足ることを知る。仮に、大食をすれば身体を損なう。世の中の行いもこれに倣い、自分の身の程に従い、かつ、程度を誤らないように慎みなさい」

つまり、「貪りの心も大食と同じで、害のあるものだ」と言っています。長い人生の中でも、常に慎ましい生活を心がければ、不自由することはないことが学べます。『徒然草』にも似た言葉があり、日本人は昔からそのことをよく知っていたようです。

法話後、花御堂のお釈迦様に甘茶をかけ、和菓子を頂きました。その後、坐禪堂に移り、一炷の坐禪を行じ、最後は希望者が筍掘りを行い、参加者は大きな筍を頂きました。

この日の龍泉院には、蘇芳や赤色のミツバツツジなどが咲き、鮮やかでかわいらしかったです。本堂近くで、マスクを付けたお地藏さんを見つけた時も、気持ちがほぐれました。

〃別れの一本杉〃が永別

椎名東堂

山門のすぐ前に立っていた大杉が、去る五月一日（土）、大勢に見守られる中で、専門業者によって伐採されました。

山門の外側には、昔から大杉が沢山繁茂してすばらしい景観を形成していましたが、一本また一本と枯死し、最近では辛うじて二、三本が往年の名残を留めていました。それも一昨年の秋の猛台風で二本を伐採し、残るは最長最太の一本だけ。文字通り、〃別れの一本杉〃になっていました。この老巨体は、高さ三一・五メートル、外周四五二センチもあり、旧沼南地域では最長で、そのために柏市の指定保存木に登録されていたのです。

しかし、長年の風雪に耐えた老古木となり、低部では空洞を生じ、中央部も東側に傾き、倒壊の恐れが増してきたので、住職・総代などで協議し、夏の台風シーズンに先立って伐採が決まったという次第です。

伐採当日は、早朝から市教育委員会の担当者をはじめ、新旧住職・総代、参禅会員など約二〇名が見守る中で、大杉はゴンドラに乗る業者さんの熟練の手によって、上部から順

に伐採されました。約二時間後には惜しまれながら姿を消しました。盛者必滅は古来の真理とはいえ、やはり、一抹の哀愁をともなう永別でした。

なお、下部の太い部分は輪切りにし、教育委員会と当山に一つずつ残し、年代の調査や遺物保存などに用いる予定となっています。樹齢については山門外の土手などを築いた龍泉院再中興、象山堪龍（かうざんたんりゅう）和尚の時代からの二二〇（二二五年）と考えられます（後日、教育委員会の算定では、やはり二二五年でした）。



作業員による伐採の様子

山門横の杉を伐採

樹齢およそ二二五年、龍泉院のシンボリック存在だった山門右側の杉が伐採された。

山門にはかつて左に二本、右に一本の杉があったが、左の杉は一昨年、強風で倒れ、残りが一本になっていた。しかし、根元が朽ち、しかも、「木は一本だと風に弱く倒れやすい」（伐採業者）ので伐採したものである。

当日は九時から伐採を始め、一二時過ぎに終了した。参禅会からは八名が伐採の様子を見学した。まず、枝を切り、幹を約四メートル間隔で上から切っていた。「この長さで運び、運んだ先で二メートルに切る」（作業員）とかで、大きなトラックで運んで行った。

龍泉院護門老杉 松戸市 小畑 節朗

佇立英姿矍鑠翁

護門三百積年功

老杉自識真帰処

待得靈苗古利豊

佇立の英姿は矍鑠たる翁

門を護って三百積年の功

老杉 自識真の帰処

靈苗を待ち得て古利豊ならん

山門の左側を竹垣で整備

龍泉院山門の左側は、南と東を公道に囲まれた「三角山」と呼ばれている傾斜地です。道に雑草がはみ出し、景観を損なっていました。そればかりか、時にそこを通る人や車にも、迷惑をかける恐れもありました。

そこで、作務班では竹垣を作って、景観を高めるとともに、道路との境界の整備を行いました。

三角山は約一五〇坪、五畝ほどの傾斜林。第二六世陰山和尚の代に植えられ、樹齢一六〇～一七〇年の杉の良木二〇本余りと、真竹の林です。椎名東堂が手塩にかけて管理されてきました。

毎年暮には、ごく細やかな竹は伐って、畑の霜除けに、少し太めの竹は、トマト・ナス・ピーマンなど夏野菜の支柱に、もつと太いのは垣根用に使うとともに、山全体は草刈機で刈払いするなど手入れをしてきました。

当初、椎名東堂は「大変では」と懸念されましたが、松井さんが熱心に説き、作業の許可を得ました。

木の杭、龍泉院の真竹をシュロ縄でイボ結いに結び、手のかかった美しい垣根は、通常

の作業日に加え、臨時の出勤も行い、三月に着手してから、一カ月足らずで完成をみました。材料代は龍泉院に負担頂き、労力は作務班の方々の御奉仕。また、在家の方々も参加され、汗を流して下さいました。



参禅会員有志の方々による竹垣づくり

今、毎年の整備で裏山には多くの野草が増えていきます。今まで見られなかった種類も、陽がとどくようになったからでしょうか、復活したようです。

キンラン、ギンラン、アマドコロ、ジュウ

ニヒトエ、ウラシマソウ、ヤマユリなど一〇数種類です。中にはオケラ、ナルコユリのような薬草もみられます。

三角山にも、以前は野草が沢山ありました。が、ウラシマソウは盗掘にあい全滅し、ヤマユリやキンラン等も見えなくなりました。雑木や細竹の伐採、下刈りなども適宜に行ったら、裏山のように復旧することでしょう。椎名東堂も、五年後、一〇年後を楽しみになさっております。

椎名東堂は参禅会の活動、特に作務班の自主的な活動について、こう感じていらっしやいます。

こうした滅私奉行^{ぶぎよう}の浄業は、仏教や禅の教えそのものであり、「参禅道場」にふさわしい立派な実践であります。

つまり、龍泉院は寺に住む者、檀信徒さんのようにこれを支える者、参禅会員の三つの推進力が、それぞれの立場から、すばらしい宗教法人を形成していくのであります。あたかも鼎^{かなえ}のように。

以前、お墓の隅を「龍泉竹径」としたように、ここも何か良い名称をつけたいと考えております。名案はありませんか？ご提案をお待ちしております。

施食会

八月一六日、緊急事態宣言下、施食会が昨年同様、規模を大幅に縮小して行われた。今年、新盆を迎えられた二六人の方のご遺族が参加。また、明石師、椎名東堂を含め計五名の僧侶が参加した。法要後、本堂前に用意された二三〇本の塔婆を取りに、大勢の方が来られ、その時ばかりは例年の活気が見られた。

参禅会員は一〇名がお手伝い。会場設営、駐車場整理、後片付けと作務奉仕に励んだ。



コロナで参加人数を抑えた施食会

参禅会、半年の活動

柏市 杉浦 上太郎

本年の年番幹事を山桐照夫さんと担当することになりました杉浦です。本年幹事の特別要務は左記の二点です。

(一) コロナ対策を如何に実施するか

(二) 参禅会発足五〇周年記念行事を如何に発案・実施するか

一 コロナ対策

椎名東堂と小畑代表幹事のご指導も頂いて参禅会から絶対にコロナ感染者を出さないという命題のもとに、感染予防策を検討しました。

この結果、坐禅堂・大悲殿において徹底した予防策を講じること、行政要請が発出されている間は月例参禅会及び自由参禅を休止することを決めました。

このため、残念ながら一月初から九月まで、月例参禅会はすべて休止となってしまいました。

ただ、行政要請が解かれた正に寸暇の時、七月三日(土)、一〇日(日)の二日間だけは自由参禅を開催。二日間で一八名の会員に参加頂きました。

このように月例参禅会は休止を続けることになりましたが、水面下における会としての活動は活発です。有志会員によって行われている龍泉院の作務奉仕と、『明珠』編集委員の方々による定期発行に向けての努力は続けられております。

二 五〇周年記念行事

参禅会再開の時に素案を提示する予定です。その節にはよろしくご協力のほどお願いします。

すでにご案内の通り、椎名東堂は、五月二五日、脳梗塞にて都内の大病院に緊急入院・初期治療、その後、柏市内のリハビリ専門病院での予後治療を経て、七月二七日、お元気に退院されました。

コロナに対する行政要請が解かれ、参禅会の再開が叶ったならば、久しぶりに椎名東堂のお元氣なお声の講義を拝聴できるものと思います。

今は、まさに『勁草の節』(「けいそうのせつ」)困難な状況にあっても、強い茎をもつ草が強風に耐え忍ぶように自分の節操や信念を堅持し続けることではないかと存じます。心を静かに整え、その時に備えたいと思います。

(合掌)

回顧「参禅会五〇年」

参禅会と椎名東堂

今年で五〇年を迎えた参禅会。この間、椎名東堂はどのようにお考えになったのか。また、参禅会をつくるまでに、どのような歩みをなされたのか。その胸のうちをおうかがいした。(インタビュー岡本匡房)

—いつ、出家したいとお考えになりましたか。

椎名東堂 父が龍泉院の住職で、私は三人兄弟で男は私だけでした。そこで、「後を継がなければならぬ」と思っていました。当初は二の足を踏んでいましたが、親戚や総代の強い勧めもあり、昭和二八年(一九五三)、一八歳の時、出家することを決めました。

—そこで駒澤大学に入られた？

椎名東堂 いや、最初は日大の宗教科に入りました。父が、その講師のような仕事をしていたので。ただ、日大出身では住職の資格を取れないので、駒澤大学に編入しました。

—どのようなことを学びましたか。

椎名東堂 駒大の仏教学部には仏教学科と禅学科があり、禅学科に入りました。人の勧

めもありましたが、歴史が好きだったからです。それに、仏教については立派な先生がたくさんおられ、禅学ははいて捨てるほどに著作がありました。しかし、歴史は実証学で、調べれば書けます。特に、中国については研究された方が少なく、「穴場狙い」でした。

—卒業後にすぐに住職になられた…。

椎名東堂 住職になるのには法戦式、瑞世式を大本山永平寺と總持寺で行うことが必要です。そこで、一年間、永平寺で修行しまし



18歳の時の椎名東堂

た。修行は厳しかった。食事の時に応量器(食器)を並べますが、それが目をつぶってもできるようになるには三〇日(九〇食)くらいかかりました。帰ってから、さらに伝法と言う血脈を継ぐ儀式も行いました。それらを経て、龍泉院住職の辞令を貰ったのは昭和三十三年(一九五八)一月のことでした。

—大学院にも入られたとか。

椎名東堂 昭和三七年(一九六二)四月です。当時、龍泉院は貧乏で、学費もなかった。そこで、家庭教師などをして、小金を貯め、入学しました。仏教学を専攻、修士課程を二年、博士課程を三年学びました。卒業後、曹洞宗の宗学研究所に就職、六年働いたのち、駒澤大学非常勤講師となり、七〇歳の定年まで、三〇年間仏教学を教えました。後半には大学院生も教えました。

—椎名東堂は永平寺で修行中の僧侶を相手に『正法眼蔵』を教える『眼蔵会』の講義を春秋二回、行っています。そのような碩学がどうして講師に留まっていたのですか。

椎名東堂 教授になるという話は駒澤大だけでなく、他の大学からもありました。しかし、寺の住職をしているので、寺を離れることは難しく、選任になりませんでした。龍泉院から駒澤大学までは遠いので。

—在家の方を対象に坐禅を教えるようになったのはいつからでしょうか。

椎名東堂 参禅会を作る前に、細々と個人的な集まりや、地域のリーダーたちを対象に坐禅を指導していました。都立高校の生徒を対象に、幾つかの団体も受け入れていました。

そこで「定期的に行った方がよい」と考え、昭和四十六年（一九七二）七月に参禅会を始めました。最初は木工場を経営していた高間さんが代表格になり、その二年後に現在、代表幹事をなさっている小畑節朗さんが入られました。

—最初はどのような状況でしたか。

椎名東堂 高間さんはお金を出さずだけで実務的なことはなさりませんでした。ポンと一〇万円寄付されたことも何度かあり、それで本を購入しました。小畑さんは成道会、旅行など現在まで参禅会が行っている行事を、ほとんど考えられました。「高間さんが生みの親、小畑さんが育ての親」といえるでしょうか。

—会員はすぐ増えましたか。

椎名東堂 特に宣伝もしなかったのですが、口コミでポツリ、ポツリ入ってくる程度でした。しかし、昭和五十七年（一九八二）に本堂が完成すると一気に増えました。

—人生で思い出す人はどのような方ですか。

椎名東堂 駒大の教授だった澤木興道老師です。坐禅中、カミナリが落ちることもあり、ピリピリしました。もう一人が新潟県柏崎市の寺の住職だった朽堀真雄老師です。父の教え子で、二夏、通い、お経や礼拝など仏教の

行事に必要な「受業」を教わりました。もう一人が叔父の椎名祐信さんです。公務員で茅ヶ崎に家を持っていました。龍泉院から霞ヶ関に通うことも多く、お世話になりました。柏市の曹洞宗の寺、大洞院の生まれで、地元の田中小学校卒です。

—参禅会五〇周年でもっとも記憶に残ったことはなんでしょう。

椎名東堂 坐禅堂の建設が一番です。単独の坐禅堂は東葛地域では当寺だけ。これにより、「参禅道場」の認可も得ました。参禅道場は坐禅活動をしなくなると取り消されます。活動を継続する必要があります。第二が中国旅行です。参禅会で五山を参拝し、それを含め、数回行いました。それと良寛さんゆかりの地への旅行です。ここで、「坐禅堂建立」を皆様に図り、賛成を得ました。

—今後の参禅会への希望は。

椎名東堂 団体参禅者を増やすことです。学校や、会社関係など、団体での参禅を勧めていきたい。立派な坐禅堂をうまく利用しないと。いまはコロナ禍で実行できませんが、日本人はボランティア活動や弱者に対し「みんなで手を取り合っていこう」という人が増えています。これは坐禅、仏教の考えと同じ

です。仏教の教えを広げること、精神的な寄りどころを与えていけば、ボランティア活動はさらに広がっていくと思っています。

—これからの参禅会に希望なさることは。

椎名東堂 これまでの活動は『明珠』を読めば、分かります。ことさらに新しいことを



都立高校の団体参禅者と椎名東堂

行うのではなく、「伝統を守り、新しい伝統をつくる」のが大切で、着実な歩みが正統です。「よきことを人に進めるのには、己がそうしなければ居られなくなる」ことです。人に勧めるのにも悟るとは言わないまでも、毅然たる信念を持つことです。「発心」、「堅固」、「ご自愛」をして下さい。

佛縁を頂いて

松戸市 小畑 節朗

参禅会員で一番若い二十代、『明珠』編集委員の市川洋介さんから「老耄の坐禅（佛法）遍歴を書け」とのお電話を頂き、人生の最終コーナーを走っている自覚もあり、筆を執った次第です。

一 佛法との出会い

昭和三五年（一九六〇）勤務していた地方銀行の北陸銀行名古屋支店に転勤になり、窓口係を担当、毎月来店される温顔の和尚さんがおられました。大本山永平寺名古屋別院副寺加藤黙堂老師であつた。

ある時、『正法眼蔵』は難解中の難解の本とお聴きしているが、どの巻から入ったら良いのですかと尋ねますと、「在家の方は『四摂法』から読むと良い」とのお示しで、岩波文庫を手にとったのが佛法との出会いです。

黙堂老師からは名古屋別院の戒会を見学させて頂いたりして、ご交誼を頂きました。老師はその後永平寺別院監院職になられた方です。

二 初めての坐禅

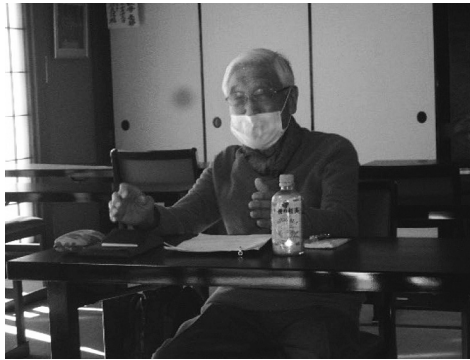
昭和三八年（一九六三）札幌支店に移動に

なつた。店内に中央寺に縁のある人がいて、毎週日曜、坐禅会を開いているとの事でした。早速、繁華街すすき野の傍の中央寺の門を叩きました。

九時止静、一時間の坐禅、その後提唱、正午解散と言う差定で月四回通いました。

提唱は山主の福井天章老師、講本は『從容録』で週一則、取りつく島も無く、只拝聴するのみでした。

福井老師は御多用で（永平寺副貫主）提唱の無い時もありました。三十則ほどお聴きた所で遷化され、後住に永平寺後堂から秦慧玉老師が晋住されました。



小畑 節朗さん

三 提唱中の秦老師一筋の涙

秦慧玉老師の提唱は『正法眼蔵』でした。

『二顆明珠』巻に至り、玄沙禪師出家の一段で父親と漁をしている時、溺れかけた父親を助けず、雪峰義存禪師の弟子になった因縁を話す時、老師は絶句して一筋の涙を流された。後にも先にも提唱者が涙を流されるのを見たのは、この一回のみである。秦老師は五歳で但馬の長松寺に預けられ、親との縁が薄かったとはお聞きしていたが、真に恩愛不能断の意味を感じ取ったことでした。

後段の雪峰の下を去ろうとして、門前で怪我、あの有名な「痛み何処より来る」の一句の提唱を感銘深くお聴きした事を今でも思い出します。老師は後、永平寺七六世になれました。

四 昔は昔、今は今

昭和四二年（一九六七）第二の故郷旭川に転勤する。秦老師にお別れの挨拶に伺うと、旭川に行ったなら、木俣大樹和尚に会ってみるが良いと言われた。行ってみると、寺とは名ばかり、民家を改造した庵でした。

大樹老師は昭和初期樺太（サハリン）に一寺を創立、樺太では大寺でした。昭和二〇年の敗戦、ソビエト軍の侵攻で本尊一つ背負っ

て旭川まで引き揚げ、小庵を開いたのです。私は不躰にも、「半生の成果が水泡に帰して仕舞われたのですね」と言ってしまったのです。大樹老師曰く

「いいえ違います。昔は昔、今は今です。樺太の寺はその時で絶対、今の小庵は小庵で絶対なのだ」と。秦老師が「大樹老師を訪ねよ」と謂われた意味がやっと理解したことでした。私にとって此の一言が人生の大きな指針となりました。

その後、小庵は樺太引揚者の絶大な支持により、永平寺直末寺院、新旭山萬台寺として見事に再建されました。

五 生涯の師との出逢い

昭和四六年（一九七一）東京浅草支店に中間管理職として転勤、昭和四八年、小さな電子部品会社に出向を命じられた。社宅が我孫子にあり、偶然、朝日新聞お知らせ欄に「坐禅天徳山龍泉院」の文字。昭和四九年（一九七四）六月の第四日曜、二百数十年を経た茅茸の本堂で生涯の師となる椎名宏雄老師にお目にかかりました。爾来四八年、賜ったご法愛は言葉で言い尽くす事は出来ません。八五歳まで道を踏み外さず来られたのは、老師の陰に陽にご指導頂いたお蔭であります。



椎名東堂と問答する小畑さん

ご存じの如く、老師は、行学兼備、五〇年に涉りコロナ禍以外は休んだことの無い参禅会、今、提唱されている『正法眼蔵』の土台には中世の仮名法語を確り踏まえておられます。水戸郊外の六地藏寺を調査されて発見された『瑩山禅師仮名法語』（以前参禅会でテキストとして使用）、提唱された事もあります。無論、専門の文献学以外の学殖も深く、その証左は枚挙に暇がありません。

六 出逢うところがわが生命

昭和五八年（一九八三）頃から会員も増加して、定例参禅は、坐禅、提唱、茶話会の現在の差定になった。その中、「茶話会は社交ではないか。内山興正老師は『坐禅は社交に

非ず』と言っているぞ」、と言う熱心な人が居て、困って、京都宇治木幡に隠棲されていた内山老師にお聞きに伺った。

老師は「それは、安泰寺での接心の時を言ったのであり、月一回の参禅会なら何ら差しつかえ無いのでは」との答え、一安心でした。それがご縁で平成一〇年（一九九八）示寂まで、毎年、数回お伺いした。老師が常に言われたのは、「生命の実物に生きる」でした。誰でも生命の実物を生きている訳ですが、進んで生命の実物を生きたること、即ち坐禅することだ。別の言葉で言うところ「出逢うところがわが生命」であると。言葉足らずですが、機会があれば詳細を亡くなる二年前頂いた、小冊子『今夜安眠頌』で語りたく存じます。

七 感謝を言葉に

とりとめも無く、お喋りをして仕舞しました。開経偈で「百千萬劫難遭遇」とお唱えしますが、私は、何と良きご縁を得、何と素晴らしい人にお逢い出来たのでしょうか！

それは偶然では無く、見えない力に導かれたとしか言いようがありません。万物おのずから功あり」と『参同契』にあります。その万物と共に生きる幸せを深く噛みしめて、感謝して、筆をおきます。 合掌

参禅会の主な内容

参禅会の起源

坐禅は当初、少人数で行っていた。しかし、人数が増えるとともに、まとめる組織が必要との声が高まり、昭和四六年（一九七二）七月二五日、「龍泉院参禅会」が発足した。

名称を坐禅会とせず、参禅会としたのは、「知識（勉強）や、作務も坐禅と同じように重要だ」という意味を込めたことによる。会則は「入退会自由」だけだった。その後、人数が増えるとともに、代表幹事、各種事務を司る年番幹事などが設けられ、さらに、作務班、『明珠』の編集班、坐禅普及委員会など、各種の活動を行う組織もできた。坐禅冒頭に椎名東堂が行う「口宣」、坐禅後に行う「提唱」のまとめも行っている。

また、涅槃会、降誕会、成道会、施食会、歳末助け合いなど龍泉院の各種行事にも協力、坐禅堂を建設する時にも積極的に参加した。

定期的に、例会（月一回、坐禅と椎名東堂の講義がある日）と月二回の自由参禅（坐禅だけ）などを行っているが、令和三年はコロナの猖獗とともに、例会、自由参禅は中止されるが多くなっている。

作務

「椎名東堂が長年育てられた庭をできるだけ保持したい」と思った松井さんが椎名東堂に「作務をしたい」と申し出て、快諾を得て、平成二十一年（二〇〇九）に始まった。原則、第一、第三金曜日と第二土曜日の午前九時から一二時ごろまで、樹木の剪定、草刈り、坐禅堂の清掃などを行っている。第二土曜日は自由参禅の日なので、坐禅の後、作務をする人も多い。毎年、四月に行われている筍掘りの前の竹林の整備など目に見えない活動も。当初、参加者は数人前後だったが、最近では一〇人前後が参加することが多くなり、寺院などが美しく整えられている。

接心

「接心」とは「集中して坐り、心を治める」という意味。昭和六一年（一九八六）に「一夜接心」として、二日間一回四〇分の坐禅を七柱（七回）行うことで始まった。しかし、参加者の高齢化に伴い、二日ばかりでは参加しにくい人が増えたため、令和元年、一日に四回行う「一日接心」になった。ただ、コロナの広がりです令和二年、三年は中止された。一夜接心の時には会員が典座になり、おい

しい夜食、朝食、昼食などを提供していたが、いまはそれも中止されるようになった。

口宣

坐禅の冒頭、椎名東堂が『正法眼蔵』、『正法眼蔵随門聞記』、『辨道話』、『坐禅用心記』、『仏遺教経』、『寶慶記』などの中から宝石のような一節を取り上げて、話されている。

中寫宏誠さんが「椎名老師の説法を伺うだけでは勿体ない」と思って録音を始め、二年がかりで一二の説法をテープ起こしし、椎名東堂が『平成一〇年月例参禅会口宣』と表題をつけられ、最初の『口宣』が発行された。その後、毎年一四話ずつ纏めて発行している。

現在は、五十嵐嗣郎さんが録音し、斎藤正明さんが、テープ起こしを引き継いでいる。冒頭、短いお示しがあり、牧野洋子・坂牧郁子さんが交代で、毛筆で書かれている。令和二年発行の二三号まで読むことが出来る。

在家得度

得度とは、「受戒をし、己が仏弟子であることを自覚すること」。仏教では最重要事とされている。単に僧侶を志す人だけでなく、在家の人でも得度することが出来、それを「在

家得度」と言っている。

龍泉院参禅会では過去四回、平成三年（一九九一）、同一三年、同一三年、同一二年参禅会員を対象に、在家得度を実施し、受戒者は合計六四名に達している。中には二回受戒した人もいる。受戒した人は椎名東堂の正式の弟子になる。

坐禅堂

龍泉院は、参禅会四〇周年記念事業の一つとして、平成二四年（二〇一二）、坐禅堂（雲堂）を建立した。きっかけは、平成二一年（二〇〇九）一〇月の「良寛さんと出逢う旅」二日目に旅館・高島屋（新潟市）で椎名東堂提案され、参禅会員が協力することにした。この建立推進のため、参禅会は「坐禅堂建設委員会」を組織、大きな役割を果たした。同委员会は平成二二年（二〇一〇）二月から平成二五年（二〇一三）一月までの三年間、計三二回の検討を重ねてきた。

全体像の設計に携わっただけでなく、建築に当たって、周辺の整備なども行った。また、多額の志納をした参禅会員も多数おり、その人々の名前を書いた額が堂内に設置されている。

坐禅堂は、参禅会以外の人も利用できる。

単に個人だけでなく、職場や学校、各種団体などで坐禅を体験したい方々も招き入れている。龍泉院の坐禅堂は千葉県で唯一の独立棟による伝統的構造をもち、龍泉院はこれにより、本山から「認可参禅道場」の印を得ることが出来た。

明珠

参禅会の各種活動を記録しようと会誌『明珠』が昭和六〇年（一九八五）四月八日に創刊された。年二回、四月と一〇月の二回発行。現在、令和三年（二〇二一）一〇月に至るまで、七六号が発行されている。巻頭に椎名東堂が『従容録に学ぶ』という文を毎回、執筆されている。

提唱

坐禅後、場所を大悲殿に移し、椎名東堂が『正法眼蔵』など、道元禅師の著作を解説する提唱を約一時間行っている。昭和五四年（一九七九）一月の『辨道話』から始まり、昭和五六年（一九八一）三月『現成公案』や、昭和五七年（一九八二）一月『生死』というように続き、最近では『正法眼蔵』中心に。

旅行

参禅会員の仏教関係の見聞を広げようと、中国の寺院旅行が始まった。その後、会員の高齢化とともに、国内に移した。新潟に良寛さんの足跡をたどり、さらに、三陸に東北大地震の後をたどる慰霊旅行を行った。

歳末托鉢

第二教区の住職を中心に、柏駅東口コンコースで毎年一二月に歳末托鉢を行い、参禅会員も参加していた。しかし、住職の高齢化で中止になった。そこで、椎名東堂が「龍泉院だけでも行いたい」と言われ、平成二七年（二〇一五）から単独托鉢が始まった。ただ、令和二年はコロナもあり「声を上げない協力要請」になった。

普及活動

一般への坐禅普及と、参禅会員の増加を目的とした「坐禅普及委員会」が平成二六年（二〇一四）に設置された。「体験坐禅」として自衛隊、柏市国際友好協会などの団体を受け入れている。アミューズ柏、開智国際大学への出張坐禅も行っている。また、旅行、托鉢など各種の行事を差配している。

参禅会と私

坐禅堂建設の会計係を振り返り

我孫子市 刑部 一郎

二〇〇九年一〇月に「良寛さんと出逢う旅」で椎名東堂が坐禅堂を建設する話を切り出されてから、早いもので一二年になります。二〇一一年三月一日の大震災が起きた日に他の三寺の坐禅堂を見学に行ったのも強烈な思い出で、最初から驚きの連続でした。

坐禅堂建設では、実際に詳細に坐禅堂の計画を進めていくと、建設費が大幅に増加しました。収入の方を見ると、大口の寄付が半分位あるにしても、寄付以外のあてはありません。途中からかなり建設資金が足りないことが分かり、いろいろな項目において大幅削減をしました。

でも、知恵はありがたいものです。どんどん良いアイデアが出て来て、金を掛けない割に良い内容のものになっていきました。終盤になって、どうしても二〇〇万円位不足することが分かり、参禅会員に再度の寄付をお願いしました。

一般の建設事業の進め方は詳細な見積りを

とり、支出の枠を決め、今度は収入の内容を詰め、入りを計りながら出を制して、収支バランスを取って進めていくのが普通です。だが、坐禅堂建設では収入は信心頼みの寄付のみで入りを計るのが難しく、宗教団体が建設事業をする場合に大変というのは、この点にあります。宗教団体の会計担当は貴重な経験ですが、大変であるというのが私の実感です。無事、赤字も出さず、会計を締めた時は正直ほっとしました。

最初から最後まで、異例ずくめの坐禅堂建設でしたが、椎名東堂、小畑代表、関係者全員が坐禅堂建設という目標に向かって一丸となって協力し、前進するというのは素晴らしいことでした。お陰で使いやすい素晴らしい坐禅堂が現存していることに大変感謝しております。

初めての坐禅

柏市 齋藤 正好

二〇一七年はいろいろなことがあった年だったので、翌年の正月に「二〇一七年に嬉しかったことトップ一〇」というリストを作成しました。その第二位に「jicom坐禅体験会に参加」とあります。以前から坐禅に興

味があつたのですが、それまで機会がありませんでした。ですから、jicomさんから「参加できる」と連絡をもらった時は本当に嬉しかったです。

当日、初めての一柱目は両手を空中で合わせるのと勘違いし、右手に乗せた左手が次第に重く感じて、坐禅の間中、ひたすら「左手が重い、左手が重い」と、そればかりを思っていました。他の雑念が浮かぶ余地がありませんでした。二柱目は正しい法界定印を教えてください、それなりに坐れたように記憶しています。初めて体験した坐禅の新鮮な感じは、今まで味わったことの無い感覚でした。

坐禅を始めて四カ月ほど経って、何とも不思議な経験をしました。坐禅堂の外で野鳥がうるさいほどに鳴いていた時があつたのですが、その鳴き声が耳で聞こえるだけでなく、体全体が耳になったように聞こえるのでした。その頃が坐禅に一番集中できていたように思います。それに比べると、最近は雑念が湧いているのかどうかもわからないような、中途半端な状態で坐っているように感じています。

一〇年続ければ少しは違ってくるのだろっか、違ってきて欲しいと思う今日この頃です。

参禅会がきっかけで

我孫子市 吉澤 誠

『明珠』の原稿を「参禅会と私」というテーマで御依頼を頂きました。活動を振り返ってみると、初めて参加させて頂いた平成二八年（二〇一六）から数えて五年、お世話になっておりました。

参加した当時は精神的に苦しい時期でありましたが、参禅会という修行の場に参加させて頂いたことで、少しずつ良くなってきたと感じることができました。大変、感謝しております。

この他にも参禅会の皆様からはありがたい影響を頂いておりますが、家族の食事作りをするようになったのも、その一つかもしれません。一人暮らしの時期もあり、また、母が調理師であったことから、料理が嫌いというわけではなかったのですが、長らく台所から遠ざかっておりました。

妻が働き始めたため、家事の負担を減らしてあげたかったのがきっかけであります。週二〜三回ほど夕食を担当するようにしています。

腕前はまだまだ発展途上の段階で、レパー

トリも少ないのですが、食材の買い出しなども含めて、それなりに楽しく取り組んでおります。これも参禅会で「料理」も修行の一つという教えを頂けたこと、また、成道会や一日接心で、会員の方が典座としてご活躍している姿を拝見させて頂いたおかげだと思います。

料理の腕前と一緒に、まだまだ未熟で修行の足りない身ですが、今後も参禅会の活動を通じて少しでも成長できたらと思います。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

想うこと

法戦式

柏市 吉岡 大龍

四月二二日、東京下北沢のお寺で法戦式を終えました。人と人の結びつきに感謝いたします。重ねて龍泉院、永正寺のお檀家様、参禅会の皆様ありがとうございました。

法戦式はカメラが来ていましたので、秋か冬にはYouTubeで視聴できる可能性があります。その時にはご覧になって下さい。私は文字が消えそうになり、どうしようもなく

目をつぶりました。

前日に会場準備のスタッフと楽しく笑いながらやっていたので興奮して一睡もできずに本番になりました。ですので、披露でなく疲労して立っています。

問答は多数ある中から五問選び、繰り返し暗記をしました。動きも伝えられている動きを自宅の和室で練習しました。誰がやっても同じようなものなのですが、やはり人はひとりひとり違うので、令和の記録に残るような法戦式でございます。

私は得度式から法戦式まで一〇年以上空いていましたので、僧籍がなくなっていました。その時期は母親と暮らし、新聞配達をして生活をしていました。

出家をすれば僧侶になれるのは当たり前だと思いましたが「私の場合いつになれるのでしょうか」と思った頃がありました。です。で、法戦式が終わって記念写真の時にそろそろいいかなとほっとしました。

私は若くなく、そういった価値から見ればたいした期待はされないう。しかし、「お前がなれ」との使命を頂いたと思います。本日は立職させて頂きありがとうございました。

馬鹿になれ

我孫子市 清水 秀男

「念ずれば花ひらく」で有名な仏教詩人の坂村真民先生は、禪の道にも親しまれた方でした。

その真民先生に次の詩があり、人生の節々において勇気づけられた内容でした。

「死のうと思う日はないが 生きてゆく力がなくなることがある

そんな時お寺を訪ね わたしは ひとり 仏陀の前に坐ってくる

力わき明日を思う心が出てくるまで 坐ってくる」

私は学生時代、人生とは何か、何のために生きているのか、自己とは何か、死とは何か等、実存的不安に悩み、大学の近くの禅寺の門を叩きました。それが私と禅との出会いです。

ご住職は「今良寛」とも称された菅宗信和尚で、戦後、戦災孤児が巷に溢れている悲惨さに心を痛め、この子供達を寺に連れて帰り育てようと決心し、男手一つで、極貧の生活の中で托鉢行願によって、立派に育てあげられました。

その数二〇〇人にもほります。和尚に教えられたのは「どうされても こうされようとも 何ともない自分を磨け」。そして「馬鹿になれ、馬鹿になれ、馬鹿は気楽じゃ、理屈の種が胸にないので気が楽じゃ」と、頭でっかちの私には、まさに痛棒でした。

そして「何のために生きる」ではなく「与えられた命を今の一瞬一瞬に燃焼させて如何に生ききるか」が私の一生の公案になりました。

これらの教えを胸に実業界に飛込みましたが、人生紆余曲折があり、今日まで数多くの失敗や挫折を繰り返しました。

また、大病を患ったりして、苦悩と失意のどん底に突き落とされ、絶望感、孤独感に苛まれたことが幾度かありました。

その度に、菅和尚の教えと上記の真民先生の詩を思い出し、勤務地の禅寺を訪ね、坐禅会に参加しました。

また、親鸞の絶対他力の教えにも共鳴し、浄土真宗の寺も訪ね、聴聞し、ご本尊の前で暫く南無の心で静寂な祈りの時間をしばしば持ちました。

その時、出来るだけ自分を無にして（馬鹿になつて）いると、自と他の障壁が次第に無

くなり、何か大いなるものに抱かれ包まれて、自分は生きているのではなく生かされているのだとの気づきを得、心の安寧と立ち直る元気を頂くことがよくありました。

そして、道元禅師の『正法眼蔵 生死』の次の言葉が、比較的素直に心に入ってくると同時に、真宗の教えにも通じるものを感じました。

「ただわが身をも心をも はなちわすれて 仏のいへになげいれて 仏のかたよりおこなはれて これにしたがひもてゆくとき ちからをもいれず ころをもついやさずして 生死をはなれ 仏となる」

「与えられた命を今の一瞬一瞬に燃焼させて如何に生ききるか」の公案はまだまだ未到達ですが、「馬鹿になる修行」を「潜行密用愚の如く魯の如し」（洞山良价禅師）の精神で臨終まで続けていく覚悟です。

最後に真民先生の「今」と題した詩を味わい、今の一瞬一瞬に生きる大切さの戒めになりたいと思います。

「大切なのは かつてでもなく
これからでもない

一呼吸 一呼吸の 今である」

沼南雜記

令和三年

●三月 例会はコロナにより休止

●四月 例会はコロナにより休止

●四月八日

―降誕会―

●五月 例会はコロナにより休止

●六月 例会はコロナにより休止
●七月 例会はコロナにより休止
●八月一六日
―施食会―
●八月 例会はコロナにより休止

創設した先輩と小学校時代、最も可愛がってくれた恩師が鬼籍に入った。諸行無常は「すべて移り変わる」という意味で、そこには日本的な意味の「無常感」はないとされる。だが、寂寥感はぬぐえない。さて、坐禅でもするか。あまり、効果はないかもしれないが。

龍泉院参禅会簡介（コロナで変更もあります）

【参禅】

一、定例参禅会

・日時 毎月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）

木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

・座談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日時 毎月第一日曜と第二土曜日

・坐禅 九時から一〇時半時まで（入堂九時まで、退堂自由）

※会費無料 年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心 本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等

一、成道会 本年は二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事 涅槃会（二月一日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）、歳末助け合い托鉢（十二月）、団体参

禅受け入れ、歳末煤払い（十二月例会後）

一、作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）

一、『口宣』（年一回）

一、『ウェブサイト <http://www.ryusenin.org/>』『明珠』『口宣』

のバックナンバーがご覧になれます。

【自由参禅】

三月 コロナにより休止
四月 コロナにより休止
五月 コロナにより休止
六月 コロナにより休止
七月 コロナにより休止
八月 四日（八名、十日（二〇名）
コロナより休止

【奉仕作務】

三月 五日、一三日、一九日
四月 二日、一〇日、二六日
五月 七日、八日、二二日
六月 四日、一二日、一八日
七月 二日、一〇日、二六日
八月 六日、一四日、二〇日

【坐禅普及委員会】

全て休止

【編集後記】

▼九月に傘寿になった。喜寿の時
には氣力がかなりあったが、最近
は各種の病氣が相次ぎ、衰え気
味。この二年間に小、中・高、
大、新聞社、現在の社の中で最も
親しかった友人を相次いで失っ
た。七月に入って、会社とともに

（岡本）

▼龍泉院の山百合を絵葉書に仕立
て、暑中見舞いにしたのは、今年
で三度目です。毎年、当たり前の
ように咲く山百合には、心遣しの
作務のあることを友達に伝えまし
た。

（坂牧）

▼コロナ禍、坐禅会は年初より休
止。とは言え、龍泉院への上山回
数は八月末で計三四回。「作務」、
『明珠』編集「仏会」手伝いなど
で上山。元気で時間に余裕のある
熟年者には、ありがたい「場所」
と「時間」である。そしてそこには
「仲間」がいる。

（佐藤）

▼今年から以前より勉強を頑張る
ようになり、バイトも始めまし
た。週に一度、家に訪問してくれ
る方がいるのですが、その人とお
話する中で、少し視野が広がった
のが関係しているのかなと思いま
す。

（市川）

●発行／天徳山龍泉院 千葉県柏市泉 81
●印刷／東港出版印刷株式会社 渋谷区渋谷 2-7-7

☎04(7191)1609
☎03(6803)8470